

原 著

## 被虐待児童の心理社会的発達におけるリスクについて

### —幼児期の発達変化の特徴—

永富徹志・東條光彦 (岡山大学大学院教育学研究科)

本研究は、虐待が与える影響について心理社会的発達の観点から検討を行った。幼児を対象とした調査の結果から、虐待環境から分離し安定した養育環境を与えることによって急激に発達が促される傾向がみられた。さらに、典型的事例の経過観察より、運動能力や生活習慣はほぼ年齢相応にまで回復したが、言語能力や対人面での課題が残っており、いわゆる可塑性については領域によって差があることが示唆された。今後は虐待環境で育った児童の発達の可能性と問題点を明らかにし、被虐待児童のケアを考える上での視点として取り入れていくべきと考えられた。

キーワード：児童虐待、発達、可塑性、幼児期

#### I. はじめに

平成 16 年度に全国の児童相談所で処理した児童虐待相談件数は 33,408 件で、統計を取り始めた平成 2 年度を 1 とした場合の約 30 倍、児童虐待防止法施行前の平成 11 年度に比べ約 3 倍に増加している(平成 16 年度厚生労働省社会福祉行政業務報告)。わが国では、急増する児童虐待への対策として重篤な虐待を受けた児童を家庭から引き離し、施設に保護するという施策を行っており、平成 16 年度厚生労働省社会福祉行政業務報告によると、約 1 割の 3,527 件が児童養護施設や児童自立支援施設などへの施設入所となっている。

一方、虐待が児童の心身発達に著しい影響を与え、虐待を受けた「中長期的」リスクが存在することもしばしば指摘されている。たとえば斎藤ら(1998)は、虐待により施設入所した児童の多くに見られる特徴として「多動」「対人関係不調」「身体発達の遅れ」「知的発達の遅れ」などを挙げている。滝川ら(2005)は、このような被虐待児の問題は、児童を単に虐待環境から引き離せば解決する問題ではなく、早期から不適切な養育環境で育ってきた児童は、単に心的外傷だけでなく、情緒発達の遅れや偏りを強いられ、そのハンディキャップが深刻な不適応や問題行動となって現れてくるとしている。

児童相談所で施設処遇を行った被虐待児の中には、安全が確保された後に著しい発達を示す事例があることが経験的に知られている。このような処遇を行うことは「死亡」のリスクから児童を守るだけでなく、被虐待児のケアとしても有効となる可能性がある。しかし、このような発達の変化についての継続的な調査は少なく(佐藤ら,2003)、家庭

と分離し施設処遇を行うことが中長期的にどのような影響を及ぼすかを示す客観的なデータは少ない。

このように虐待環境と引き離し施設処遇を行うことにより対処可能な問題と対処が困難な問題があることが窺われる。そこで本研究では、経験的には知られている施設処遇後の発達の変化について、継続的な視点から実証的検討を行い、その有効性を検証するとともに、事例調査から対処が困難な問題についての考察を行うことを目的とする。

#### II. 調査

本調査では児童相談所にて発達(知能)検査を実施し一定期間後に再検査を行った被虐待児について検討を行った。今回は最も虐待のリスクが高いとされ、発達の変化の大きい乳児期～幼児期の経過について調査を行った。

対 象：虐待を主訴とし児童相談所の措置により児童養護施設在籍中の幼児の事例

方 法：入所直前(あるいは入所直後)の発達(知能)検査と一定期間後に行った検査の種類が同一の事例について、指導記録から発達(知能)検査結果を収集した。養護施設在籍の幼児 48 例のうち、本調査に該当する児童 15 例の発達指数(以下 DQ)または知能指数(以下 IQ)変化を検討した。また、入所時の DQ(IQ)の平均と入所後 1 回目の検査結果の平均を図 2 に示した。なお、虐待の種別による分類は、標本が少なく種別に偏りが見られるため(ネグレクト 11 例、身体的 1 例、心理的 3 例)、今回は省略した。

#### III. 結果

図 1, 2 に施設措置前後の検査成績の変化を示す。

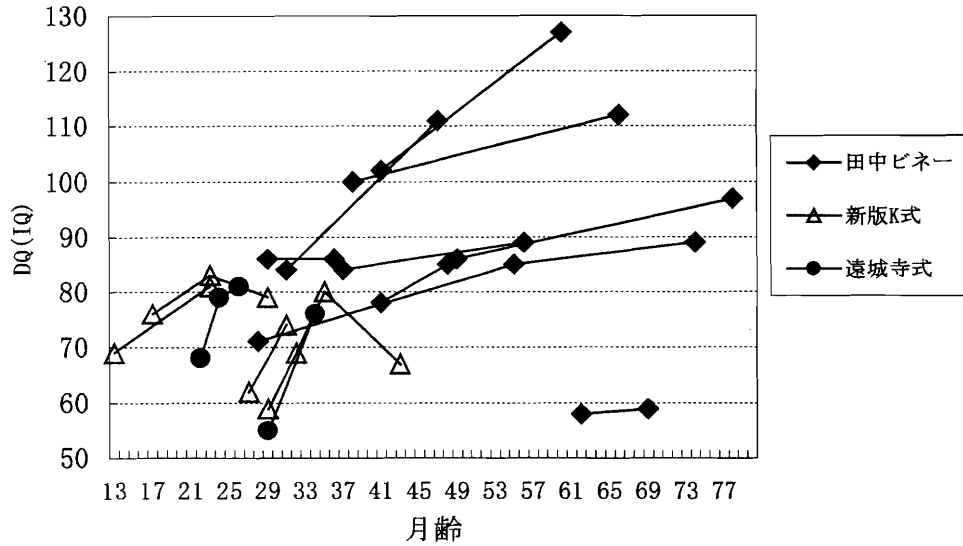


図1 養護施設入所中の幼児(就学前・虐待あり)の検査成績の変化 (N=15)

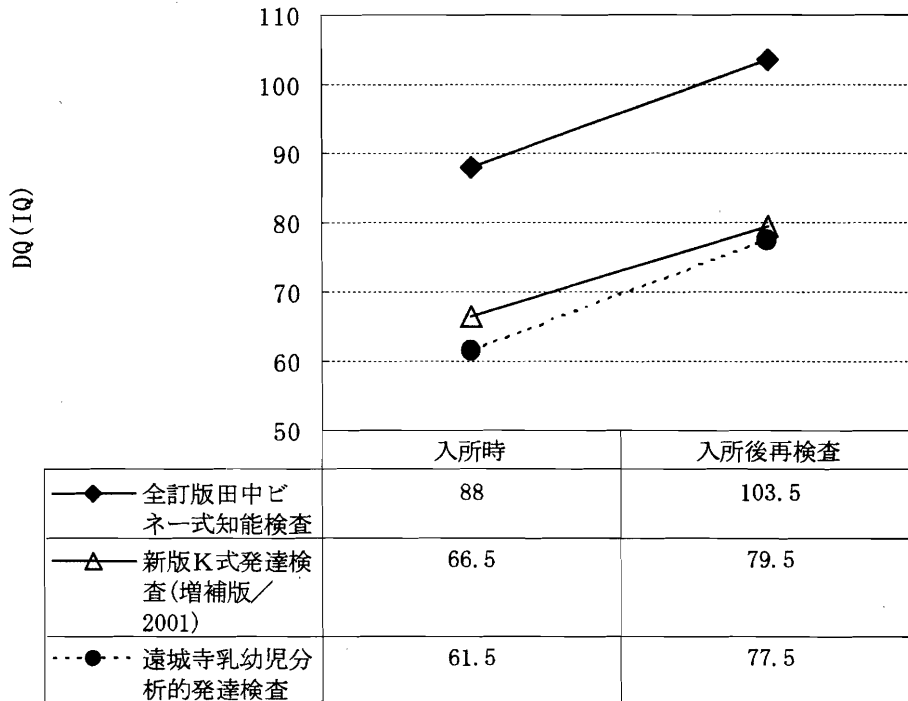


図2 入所時と入所後のDQ(IQ)の平均検査成績の変化 N=15

図1, 2から示唆されるように、虐待から保護され施設へ入所となった時点でのDQ(IQ)は全体的に低い。しかし、その後の再検査では全般にDQ(IQ)が上昇している傾向が認められた。特に月齢36か月未満の幼児では6例中5例のDQ値が10程度上昇しており、数か月の短期間で発達が促進されている事例が目立

つ(図1)。

以上の調査から施設処遇を行った児童(幼児)において比較的短期間にDQ(IQ)の上昇が認められた。しかしこのような検査では複数のスキルを総合的に判断するため全体的な傾向をつかむのには適しているが個々の領域についてのバラつきや差を見ていくた

めにはそれぞれの事例を詳細に検討していく必要がある。そこで次に事例の調査を行い、具体的な発達の様子と発達しやすい領域と発達困難な領域について検討していく。

#### IV. 事例報告

今回調査を行った対象の中から保護した後の発達の变化が顕著でその変化が典型的経過を呈したと考えられるAについて報告する。なお、プライバシー保護の観点から主旨を損なわない程度に内容を一部修正している。

##### <Aの出産時の様子と身体発達>

39週で出生。出生時の身長体重は正常値であったが、1歳半の時点ですでに身長体重共に-1SDの発達であり、保護した時点でもその差は埋められておらず、-1SD—2SDを示すものであった。

その他に卵や牛乳にアレルギー反応を有し、中耳炎、アトピー性皮膚炎、貧血が認められた。

##### <経過>

Aが1歳半の時に家庭の事情で母が不在となる。しばらくは祖母を中心に養育を行ってきたが家庭では養育できないとのことで相談があり、乳児院へ入所することとなる。その際のAの発達は運動面や言語の面でやや遅れが見られるものの正常範囲内の発達であった。

数週間後、母が家庭に復帰したため、Aも家庭へ帰ることとなる。これまでは育児を放棄しがちであったとのことでしばらく母子の経過をみるが、適応状況は良好とのことで乳児院の措置を解除する。

数ヶ月後、民生・児童相談員より虐待の疑いがあると通告が入る。確認したところ、母は父と離婚し、母とA、Aの姉の三人で生活をしていた。その中で、姉への暴力や重度の育児放棄(ネグレクト)など虐待が疑われる情報が得られた。その間、離婚した父も母への支援を試みたが改善は見られなかったため、児童相談所ではこのケースを虐待と判断し、家庭訪問の継続と関係機関に調査と見守りを依頼した。

半年後Aが2歳を過ぎた頃にAの姉の親権が父に移り、その後Aと母の二人暮らしとなる。その頃から母は感情の起伏が激しく奇妙な言動が目立つようになり、Aの安否が確認できないことから、強制的な立ち入り調査<sup>1</sup>が検討された。

立ち入り調査の際には、室内はゴミが散乱し、どこにAが居るのか分からない状況であった。またAは異臭を放っており、シャツは汚れ放題、髪の毛にはご飯粒状のものがたくさん付いている状態であったため、一次保護を行った。保護された時点での年齢は2歳5ヶ月で、体重は10.5kg。これは1歳半の標準体重で、2歳半の標準の-2SDの体重である。小児科医が診察により全身のアトピー性皮膚炎や社会的発達の遅延が認められ、被虐待児症候群<sup>2</sup>と診断された。

数日後Aが一次保護所での新しい生活に慣れたところで発達検査を実施。それまでの生活環境と大きく変化したにもかかわらず、緊張は見られず人見知りなく誰にでも懐く傾向がみられた。発達検査成績は、左記1歳半時点での発達指数と変わらず、運動面、認知面、言語面ともに全く伸びていない状態であった。

##### <検査成績による本児の発達状況の変化>

○新版K式発達検査(3歳7ヶ月実施は2001版、その他は増補版)による発達の経過の把握(図3、表1.)

家庭の事情で乳児院入所となった1歳5ヶ月の時点では全領域のDQが94と正常範囲を示しているが、立ち入り調査を行った2歳5ヶ月の時点ではDQは59であった。その後短期間にDQ値が上昇していることが窺われる。養護施設入所後の3歳7ヶ月ではDQが67と停滞している。これは、「姿勢・運動」「言語・社会」が停滞していることにより全領域の合計得点で求められるDQ値も低くなるためである。

領域別に見ると、特に変化が大きいのは「認知・適応」の領域である。この領域は積み木を積むことや型はめ、描画などを指示に従って行う項目があり、乳児院でもケアしやすい領域であったと考えられる。一方「姿勢・運動」「言語・社会」の領域は乳児院入所後も伸びは緩やかであった。

○遠城寺式乳幼児分析的発達検査による経過の把握(図4、表2)

ここでは発達年齢を月例に変換しており、発達のバランスを参照するため、横軸に発達領域を示した。

家庭の事情で乳児院入所となった1歳4ヶ月時点では運動や言語領域がややゆっくりではあったが、正常範囲内の遅れであった。2歳5ヶ月の立ち入り調査時には情報が少ないため実施不能であった。

<sup>1</sup> 立ち入り調査：児童福祉法第29条において、都道府県知事(委任により児童相談所長)が児童の居所等への立ち入り調査をさせることができる(厚生労働省,2005)。

<sup>2</sup> 被虐待児症候群：Kempeら(1962)は、両親または養い親などの保護者から、重篤な虐待を受けた子供の臨床像をBattered Child Syndrome(被虐待児症候群)と命名した。

家庭の事情で乳児院入所となった1歳4ヶ月時点 <運動発達>  
 では運動、言語領域がやや遅滞傾向であったが、正 保護の時点では「走る」程度の運動能力はあった

表1 新版K式発達検査(数値はDQ(発達指数):3歳7ヶ月時は2001版、その他は増補版)

生活年齢	姿勢・運動	認知・適応	言語・社会	全領域
1歳5ヶ月	82	100	82	94
保護(乳児院)				
2歳5ヶ月	62	62	48	59
2歳8ヶ月	63	75	59	69
2歳11ヶ月	66	91	69	80
(養護施設)				
3歳7ヶ月	65	84	53	67

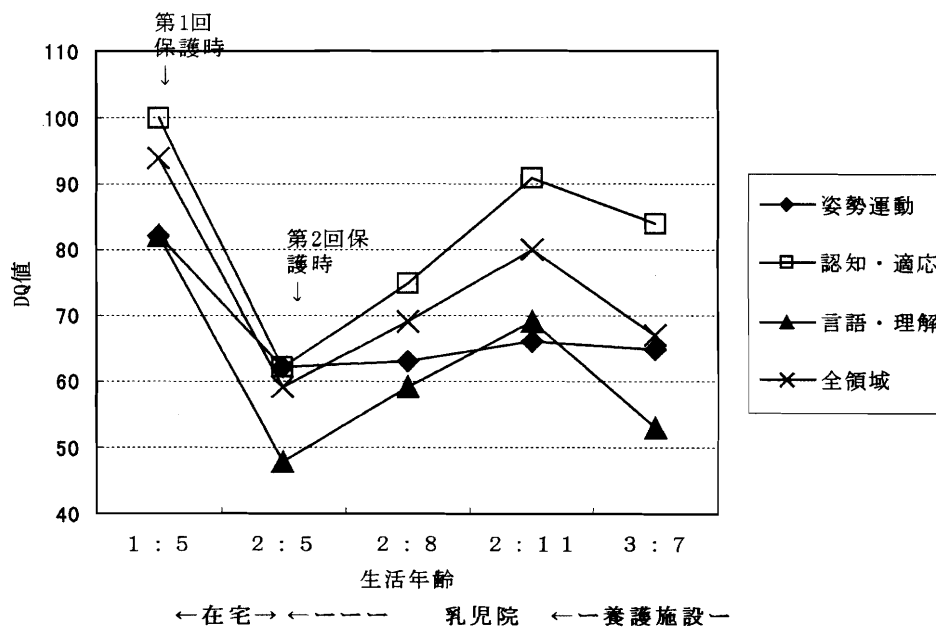


図3 新版K式発達検査によるAの発達の変化

常範囲内の遅れであった。2歳5ヶ月の立ち入り調査時には情報が少ないため実施不能であった。乳児院入所3ヵ月後2歳8ヶ月の時点では言語面の遅滞が顕著に見られるが、さらに3ヵ月後2歳11ヶ月の時点では言語理解が進んでいる。養護施設入所後も言語面や対人面での遅滞が認められる。移動運動は養護施設入所後一定期間遅れが認められたが4歳の時点ではほぼ年齢相応の発達を示している。基本的な生活習慣に関しては、当初から良好な発達を示しているが、対人面では養護施設に入り友人関係が複雑になったことから遅れが見られる。

年齢が大きくなるに従い発達のバランスの悪さが目立つようになった。

が、一人で階段の昇降が出来ず、両足でジャンプすることも難しかった。手の運動に関しては、鉛筆を持たせても殴り書き程度で円錐画の模倣などもみられなかった。2歳半歳半の年齢にもかかわらず、運動能力は1歳半レベルであった。

乳児院入所後3ヶ月の時点では、手すりを持ち一人で階段の昇降が出来るようになり、ボールを蹴るなどの遊びもみられた。半年後には両足でジャンプすることもみられたが、粗大運動の発達は全体的に緩やかであった。養護施設へ変更となった後もしばらくは緩やかに発達していたが、徐々に発達が促され養護施設で1年を経過する頃には、ケンケンやでんぐり返しを行うなどほぼ年齢相応の運動能力を示

していた。手の運動に関しても、乳児院入所後 3 ヶ月で円錐画や直線の模倣が可能となっている。養護

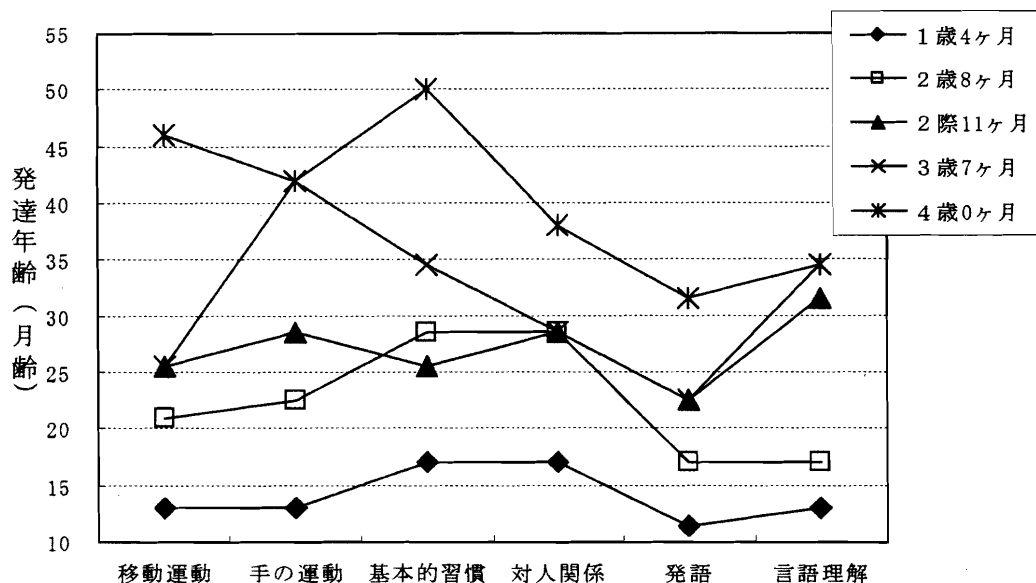


図4 遠城寺式乳幼児分析的発達検査によるAの発達の変化

表4 遠城寺式乳幼児分析的発達検査(数値はDA(発達年齢))

生活年齢	移動運動	手の運動	基本的習慣	対人関係	発語	言語理解
1歳4ヶ月	1:1	1:1	1:5	1:5	0:11.5	1:1
保護(乳児院)						
2歳8ヶ月	1:9	2:4.5	1:10.5	1:10.5	1:5	1:5
2歳11ヶ月	2:1.5	2:4.5	2:1.5	2:4.5	1:10.5	2:7.5
(養護施設)						
3歳7ヶ月	2:1.5	3:6	2:10.5	2:4.5	1:10.5	2:10.5
4歳0ヶ月	3:10	3:6	4:2	3:2	2:7.5	2:10.5

施設変更後半年の時点ではすでにはさみを使ったり、ボタンをはめたりと年齢相応の微細運動を示していた。

粗大運動については乳児院という環境もあり十分発達が促される状況にはなかったと推察される。養護施設に変更となり、広々とした環境を利用できるようになったことが発達が促進された一つの理由と考えられる。微細運動に関しては乳児院においても絵を描いたりおもちゃにふれたりし発達が促進される機会があったため早くから正常に近い発達に追いついたと考えられる。

<言語発達>

保護の1年前の時点で何語はよく出ていたものの有意味語は「マンマ」1語のみでやや遅めの発達で

あった。

保護した際には有意味語はなく音声模倣がいくらかできる程度。語の模倣は見られない。指差しも見られたが物との対応はない。2歳5ヶ月の生活年齢に対し、言語発達は1歳前半のレベルであった

乳児院入所後3ヶ月で「ワンワン」「ポッポ(汽車)」「ハイ」などが聞かれるようになり単語は少しずつ出ているが有意味語は10以下であった。半年後の時点では言語理解がさらに進み「さかな」の絵カードに対し「さ」、「くつ」の絵カードに「つ」、「かさ」の絵カードに「あめ」などと答える。物と名称が一致するようになり言語理解は進んでいるようであるが語を発する能力は乏しいことが窺われる。養護施設変更後、

言語訓練に通うこととなる。3歳頃から二語文も聞かれるようになるものの、依然として単語の一部や語尾のみで発声する事が多く、構音も未熟で聞き取りにくいことが多い。4歳の時点では、複雑なやりとりは困難なものの同年齢の児童との会話もいくらか出来るようになり、場にあった発言が多くなる。二数詞の復唱は可能だが、「あかいらんご」「おおきいくま」など二語文の復唱は困難。5歳で二語文の復唱も可能となるが全体的に言語の発達は緩やか。6歳前には自分の名前(ひらがな)を読むことが出来たが、名前以外のひらがなは読むことが出来なかった。また、ひらがなの模写もいくらかできたが、右側から書き始めたり、鏡文字になることが多く見られた。

保護時点で言語発達が停滞していたことについては、ネグレクト状態で言語を獲得するのに十分な環境ではなかった可能性がある。乳児院でも言語を学ぶ機会が少なく言語発達に対し特別な支援は行うことが出来なかったが、少しずつ語彙が増え言語理解が進んでいったと考えられる。さらに養護施設に入ってから言語訓練に通ったことと言語を用いたコミュニケーションの機会が増えた(乳児院よりも意味語を話す人が多い)事による影響を受け、発達が促されたと思われる。ただし、抽象的な概念理解は困難など高度な言語能力は身につけていない。

#### <生活習慣>

1歳半の時点ではスプーンを持ち食べようとしたり、着脱衣の際には足を広げるなどの協力動作があり概ね年齢相応の生活習慣を身につけていた。

保護の時点での詳細な生活状況は不明であるが、食事の際の咀嚼力の弱さが報告されている。咀嚼に関してはその後約2週間で問題なく普通食を食べられるようになっていたが、偏食が多く、野菜類を食べず食事も少ないとのことであった。乳児院入所半年後には、スプーンを持ち一人で食事をしたり、パンツの脱衣が可能となるが、排泄の予告などはなく未熟な面も多く見られた。養護施設入所後は上着の脱衣や靴を一人で履くようになり、排泄の予告も完全ではないが聞かれるようになった。4歳の時には着脱衣が一人で出来、入浴の際に自分で身体をある程度洗うことが出来るなどほぼ年齢相応の生活習慣を身につけていた。

生活習慣についても保護の時点では十分に躰がなされておらず、食事についても十分に習慣づけられていなかったことが窺われる。保護の後の比較的短期間(半年程度)で食事の習慣が身に付き、1年半で着

脱衣や排泄の習慣も身に付いている。

#### <対人関係>

保護を行った際にも大人への恐怖心などは見られないことから、身体的な虐待は受けていないような印象を受ける。しかし、相手をしていて人が目の前からいなくなることへの不安がみられ、見捨てられ不安は強い。誰にでも人見知りなく懐き、脱抑制型の愛着障害が疑われた。

乳児院入所後は、数名の特定の保育士が中心に関わり、保育士がAと離れる際には声をかけてもらい必ず後で戻ってきたことを報告してもらった。また、「イナイイナイバー」など遊びの中で安全な別れと再会を経験してもらうことを心がけた。乳児院入所後3ヶ月で表情が豊かになり、保育士の模倣なども積極的に行うようになる。知らない人物の前では反応が乏しいことや泣き出すこともあり人見知りかと思われたが、半年後の面接では初めての人物に対しても警戒なく関わり、保育士との分離も抵抗が見られなかった。ただし、特定の保育士に寄っていくことなどがあり、十分ではないが特定の特別な人物とその他の人物の区別はつくようである。わざと注意を受けるような行動をし注意を引こうとしたり、保育士にほめられると手を叩いて喜ぶことも見られるようになる。

養護施設変更後は同年代の児童との関わりも多くなるが、しばらくは集団にはいることを嫌い一人遊びが中心であった。4歳頃には集団に入り年少児の世話をしようとしたり、けんかをして言いつけにくるような行動も見られるようになった。しかし、関わりが一方的であったり、順番が守れなかったり周囲の状況から判断し行動することは苦手である。

また、母子間の愛着は全く窺われず、当初から愛着障害が疑われた。施設で特定の職員が関わりを持つことによって、全く知らない他人との区別は可能となったが、愛着関係を形成するには至っていない。快・不快の表現は見られるものの情緒的な表現は乏しく他者とも情緒的な交流を行うことは難しいことが推測された。また、大人とのやり取りが比較的円滑にできるようになったことに対し、同年代の児童とは関わろうとすることも少なく、一方的なやり取りが目につく。

## V. 総合考察

虐待環境から離脱し、安定環境に保護することにより、発達が促される傾向が多くみられ、通常恒常

的とされる DQ(IQ)が、環境により大きく左右されることが示唆された。特に、今回の調査対象は幼児であり、発達上最も可塑性に富む時期であるため、比較的短期間で知的な機能が発達(回復)した可能性が考えられる。藤永ら(1987)や佐藤ら(2003)の調査でも年齢が低いほど保護された後の伸びが大きいことを報告している。しかし、逆に言えば年齢が高くなると発達の可塑性が損なわれる可能性が高くなるということである。実は、脳科学の分野でもこのような可塑性の問題が取り上げられており、Batesら(1994)は、発達初期の脳損傷の影響は確かに存在するが、その大きさは同じような損傷を受けた成人の場合と比べるとずっと小さいという。落合・石王(2006)も幼児期に脳損傷を受けた事例の認知機能について報告しており、その中で、障害の程度は同じ損傷を受けた成人のものより小さく、発達の段階でほとんど正常のレベルに達するが、困難な課題はできなかつたとしている。Teicher(2006)や遠藤ら(2006)の研究で虐待が脳にダメージを与えることが報告されており、上記の脳損傷の研究と関連して考えると、虐待からの保護は早ければ早いほど正常に発達する可能性は高いが、その影響は何らかの形で残ってしまうことが示唆される。

事例 A から DQ 値においてはある程度の回復を示すような傾向が見られるものの領域別に詳細に見ていくと発達が促進されにくい領域があることが窺われた。以下領域ごとに発達の可塑性について考察する。

#### <運動発達>

事例 A の運動面の発達は比較的良好に発達したといえる。乳児院に於いては自由に運動できる場が少ないというハード面の問題があり、粗大運動の発達は乏しかったが、自由に動くことのできる広さのある養護施設に変更となった後は、ほぼ正常な運動能力を有していた。4 歳程度でも環境を変えることで発達の変化が見られ、可塑性は比較的高いと思われる。藤永ら(1987)の報告した 6 歳と 5 歳の 2 人の事例でも約 3 年で同学年水準に追いつき、その予後も良好であったことが報告されている。運動面に関しては事例 A も藤永らの事例でも虐待の影響と思われるものは初期の発達の遅れのみで虐待の後遺症と思われるような症状は報告されていない。

#### <言語発達>

事例 A の言語発達は比較的ゆっくりである。虐待による保護の以前から言語発達はやや遅めであり、

もともと言語発達の遅い子であった可能性もあるが、保護された時点とその後の発達とを比較すれば、やはり虐待の影響が強かったといわざるを得ない。保護した後の A はものの名称や語彙の数は次第に増えていったものの、抽象的な概念理解や相互のコミュニケーションという意味に於いては課題が多いように思われる。

Corby(2002)は、虐待を受けた子どもの学校成績は低く特に言語の使用に問題があることを指摘している。また、その理由を説明する仮説として、周囲に対する信頼の欠乏ゆえに言語の発達に遅れがあり、それが今度は、リスクを恐れ話すことと表現的言語表出の練習をほとんどしないという結果をもたらすとしている。

このように考えると保護以前の A の周囲には言葉をかけてくれる大人もなく、コミュニケーションをとりたいと思うような愛着関係も存在しなかつたことから、言語を獲得していく土台となる愛着関係に問題があることが影響しているように思われる。言葉が関係を作るために大切なものという体験がないために、自分の要求を伝えたり周囲を操作する道具としての役割が大きく、情動をはらんだ親和的な相互交流のために言語を用いることが困難と考えられる。

以上のことから被虐待児の言語発達に於いては、語彙の獲得や構音のための訓練にはある程度の効果を示すが、より積極的にコミュニケーションをとるために必要な情動理解や概念理解など高度な言語能力に関しては愛着など関係性のケアが欠かせないことが窺われた。

#### <対人発達>

A は当初から誰にでも愛着を示す脱抑制型の愛着障害が疑われ、その後大人とはいくらかかわりが持てるようになったものの同年代の児童と円滑にかかわりを持つことは難しいようである。

このような愛着障害の観点以外に森田(2006)は対人関係や行動のパターンについて二つの視点から示唆を与えている。1 つは虐待を心的外傷と捉え、その行動をトラウマ性の行動とした視点である。トラウマは海馬レベルに影響を与えることが医学的にも示されており、そのために起こる症状として、フラッシュバック、乖離などの神経症的な反応、行動としては易怒性、二面性、衝動性などが挙げられる。虐待は日常性が崩壊してしまうレベルのものだけではないが、その出来事の再現や人格の乖離など自然災害などのトラウマと共通する点が多く見られ、さ

らには、様々な事情により施設へ入所となること自体がトラウマである可能性を森田は指摘している。一方でトラウマ反応だけでは説明できない行動もあり、森田はもう一つの観点として特有のパーソナリティーを有している可能性を指摘している。出生より虐待的な家庭の雰囲気や親との関わりによって特徴的な人格を形成してしまった可能性である。トラウマ性の行動を外界から侵入してくる否定的なエネルギー(トラウマ)への反応とする事に対し、このような特徴を示す児童は、自らの内界に虐待環境に適応していくための適切でないシステムを構造化していったと考えられる。

事例 A の現在の対人関係のとり方をトラウマ性の行動とするかどうかは判断が難しいが、慢性的な虐待を反復して体験した子どもも現実の否認や感情麻痺などが長期に及ぶ可能性も指摘されており(西澤、1999)、今後の長期的な経過を考える上では重要な視点と考えられる。さらに特有のパーソナリティーに関しては A の場当たりの対人関係のとり方が、何が起きるか予測不可能な養育環境に適応した結果と考えれば理解可能な面もある。どちらにせよ対人発達に於いては長期的な変化を見ていく必要があると考えられる。

以上のように対人発達の領域では、愛着の問題、トラウマの問題、特有のパーソナリティーの問題など様々な可能性が考えられ、そのケアには多くの努力が必要と考えられる。しかし、事例の A は大人との関係が築けるようになり、ゆっくりではあるが関わりを持つ範囲も広がっている。決して対人発達が欠如しているわけではなく、支援の方法によっては改善の可能性も十分あると考えられる。

<まとめ>

事例 A について運動発達・言語発達・対人発達の観点から考察を行った。虐待環境から分離することで発達の可塑性が示された一方で A が示したような回復困難な領域が存在することも示唆された。今回指摘されたような言語発達や対人発達など回復困難な領域がそのまま放置されることにより、それがハンディキャップとなり、将来家庭復帰や施設処遇を困難とする不適応や問題行動となって現れてくる可能性がある。さらに長期的な予後についても検討していく必要があると思われる。

今回は事例の数も十分とは言えず、今後はこのよ

うな虐待を受けた児童の継続的なデータを蓄積し、ケアが可能な領域と困難な領域を明確にしていくことにより被虐待児童の心理的発達の支援の可能性を広げていくことが望まれる。

## 参考文献

- Brian Corby 萩原重夫訳 『子どもの虐待の歴史と理論』明石書店 2002
- 遠藤太郎・染矢俊幸「ADHD と学校/社会 多動と子ども虐待」そだちの科学 6 67-71 2006
- 遠藤太郎・田村立・染矢俊幸「愛着と心のはぐくみ 脳科学の視点から」そだちの科学 7 24-29 2006
- 藤永保・斎賀久敬・春日喬・内田伸子 『人間発達と初期環境』有斐閣 1987
- Martin H Teicher 監修 友田明美著 『いやされない傷 児童虐待と傷ついていく脳』診断と治療社 2006
- 森田喜治 『児童養護施設と被虐待児—施設内心理療法家からの提言』創元社 2006
- 西澤哲 『トラウマの臨床心理学』金剛出版 1999
- 落合正行・石王敦子 「発達初期の言語・認知に関する脳の可塑性を規定する要因の検討」追手門学院大額人間学部紀要 20 13-37 2006
- 斎藤 学 『児童虐待(臨床編)』金剛出版 1998
- 佐藤洋子・赤木美香子・有住洋子・松田るり・三谷聖也・高橋桃代・滝井泰孝 「被虐待児の発達評価と発達可能性について—被虐待児が養育環境変化後に示す発達についての心理学的検討」明治安田心の健康財団研究助成論文集 39 36-43 2003
- 滝川一廣・四方耀子・高田治・谷村雅子・大熊加奈子 「「児童虐待に対する情緒障害児短期治療施設の有効性に関する縦断研究」—2000年から2004年に亘る縦断調査の報告—」子どもの虹情報研修センター紀要 3 93-113 2005
- 吉田敬子 「子どもの発達過程を視野に入れた児童虐待の理解と対応」子どもの虹情報研修センター紀要 3 29-41 2005



---

Title: Problem in the psychosocial development of child who receives child abuse

Tetsushi NAGATOMI (Graduate School of Okayama University)

Mitsuhiko TOJO (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract: The purpose of this study is to examine the influence to the psychosocial development by child abuse. From the result that an ill-treated child was divided by a family, the toddler development tended to recover rapidly by rescuing the infant from child abuse. Furthermore, as a result of follow-up study of a typical case, neither linguistic competence nor the interpersonal relationships have recovered even to the age and the same though moving ability and the life skill almost recovered even to the age and the same. It was suggested that a development difference occurred by area.

Key words: Child abuse, Development, Plasticity, Infant

---